

氏名	南 あかり
ヨミガナ	ミナミ アカリ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第333
学位授与年月日	令和2年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 散文テキストの音楽性と旋律の構築性 —モーリス・ラヴェル《博物誌》から紐解く— 〈演奏〉 Faure Soir (Op.83-2, Des-dur, 3'00) 《La bonne chanson》より La lune blanche luit dans les bois (Op.61-3, Fis-dur, 3'00)ほか

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	永井 和子
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	大森 晋輔
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽研究科)	野々下 由香里
(副査)	東京藝術大学	准教授	(音楽研究科)	浜田 理恵
(副査)	桐朋音楽大学	非常勤講師	(音楽学部)	太田 朋子

(論文内容の要旨)

本論文はラヴェルの《博物誌》を題材に散文テキストの音楽性と、そのテキストにラヴェルがどのように旋律の構築を行ったかを明らかにすることを目的とする。フランス歌曲に使用される詩は伝統的に一定の形式を持つ韻文であったが、ラヴェルはジュール・ルナールの散文詩集『博物誌』から5つの詩を選び作曲を行なった。彼にとって散文や自由詩は韻文よりリズムカルで、曲をつけるのに適しており、特に《博物誌》のテキストは独自のデクランシオンを要求するとラヴェル自身が述べている。このようなラヴェルの散文への関心を基に散文テキストの音楽性に目を向け、《博物誌》のテキストのどのような特徴がリズムカルであるのかを考察し、ラヴェルがそれらの特徴をどのように構築し旋律を作り上げたかを述べる。

第1章では、ラヴェルの独唱声楽作品における詩のスタイル、詩人、詩の作られた時代の選択の傾向を概観し、また本人や友人の残した発言を元に散文などの自由なテキストへの関心を明らかにする。初期の作品から後期の作品に至るまで、1人の詩人に集中して作曲することなどはせず、また同時代の詩人から中世の詩、民謡などに作曲するなど多様な詩の選択を行っていた。そして初期の作品は韻文を使用していたが徐々に散文、または韻文であっても変則的な形式など、より自由な形式の詩に関心が移行したことがわかる。友人のクリングゾルもラヴェルが散文に音楽をつけることを好んでいたと述べており、ラヴェル自身も《博物誌》を例に挙げ散文がリズムカルであると述べていることから、散文の音楽性に魅了されていたということがわかる。

第2章では具体的に《博物誌》がもつ散文の音楽性について、主にリズムに関する以下の5つのテキストの特徴を挙げ、ラヴェルの作り上げた旋律との関連を探る。

- ・アクセントの配置が作り出すリズム
- ・自由な朗読速度によるリズム
- ・文の長短や不揃いの段落が作り出すリズム
- ・読点の効果によるリズム
- ・単語末の「無音のe」の発音の有無が作り出すリズム

ラヴェルは上記のそれぞれの特徴を生かした作曲を行い、なおかつそれらの音楽的効果を用いて詩の内容や情感を伝える役割も果たしていることがわかった。

第3章では2章で挙げたリズムの特徴の1つである無音のeの記譜法と演奏法について述べる。《博物

誌》の大きな特徴として一般的なフランス歌曲では発音される無音のeを発音しない場合があることが挙げられるが、その記譜法はあいまいな点が多く、一見発音の有無を判断するのは困難に感じる。そこで演奏する際の1つの指標として記譜法を6つに分類し、そのそれぞれの発音の方法を提示する。発音の仕方として、「無音のe」を完全に発音する、もしくは軽く発音するもの以外にも発音しない、ほんの一瞬発音すると捉えられるものがある。

以上のことを考察した結果、ラヴェルは《博物誌》のもつ散文という形態が作り出すリズムの特徴に沿って旋律を構築し、それだけでなくその特徴を表現の一部として利用していたことが明らかになった。また無音のeについても記譜法を細かく分析することにより、それぞれの記譜の微妙な違いを明らかにし、実際の演奏に際しての方法論の一つとして筆者の考える演奏法を提示することができた。

(総合審査結果の要旨)

本論文は、モーリス・ラヴェルの歌曲集《博物誌》(1906)における散文テキストと旋律の関わりの特徴について論じ、その記譜法と表現を関連させ演奏法を提示したものである。第1章ではラヴェルの声楽作品における詩の選択傾向を概観し、作曲者本人の発言等を元に「自由」なスタイルのテキストへの関心の強さを明らかにしている。第2章ではジュール・ルナールの散文詩集『博物誌』の言葉のリズムに関する特徴を5つ挙げて旋律との関連を探り、第3章において前述された特徴の中の「無音のe」についての記譜法が述べられている。フランス口語ではほとんど耳に聞こえる事がない「無音のe」であるが、一般的な仏歌曲では原則として「無音のe」を含む全ての音節に一つの音符が当てられることが多い。しかしこの作品では「無音のe」の多くに音符が当てられていない。その点ラヴェルの記譜法にはあいまいな点が多いことから申請者は記譜法を6つに分類しこの作品の「無音のe」全てに関してそれぞれの発音の仕方とその表現効果を考察し、演奏時の一つの指標として提示している。この作業はあくまで演奏家の視点で究められており精神的に根気よくなされ論述された内容となったことは評価に値する。またこの作品全5曲の詳細な歌唱上の分析は他に例がなく今後の声楽家にとっての良い指針になるであろう。

一方《博物誌》は間違いなくフランス歌曲史の一つの転換点に位置する作品だが、そうした術軸的な視点がもう少しあればラヴェルがなぜこのテキストを選んだのかということも含め、より射程の広い説得力のある行論にむすびついたで、あろう。また記譜法に関して色分けするなどその分類の視覚化の試みは素晴らしいが、読み手の理解を困難にしまい残念である。論文の体裁や形式的な不備もあるが扱いの難しい散文テキストをもとにした歌曲作品に果敢に取り組み、一つの演奏法を提示したという点で、本論文にはそうした欠点を補って余りある意義がある。ラヴェルの独唱作品全体を見渡した上での記譜法の提案も、後に続く演奏者にとって有益であろう。

<演奏>プログラム前半はG.フォーレ、C.ドビュッシー、H.デュパルク、H.ベルリオーズ等の作品を集め、後半はモーリス・ラヴェルの難曲2作品《ステファヌ・マラルメの3つの詩》全3曲、《博物誌》全5曲を演奏。艶のある美しい響きで好演であった。が、発音のポジションが一定でなく結果ニュアンスに乏しくなる部分があったことが惜まれる。「無音のe」に関しては論文執筆で究めたことがかなりの支えになりこの申請者の求めるあり方を打ち出していた。こうした発音、表現を自在にする楽器としての声…課程博士までの研鑽で飛躍的に発声面の成長が表れており、曖昧さのない誠実な演奏が伝わってきていた。以上、論文と演奏を通して本研究は博士学位授与に相応しいと判断した。